女人成仏—変成男子について—

望月海淑

1

法華経の提婆達多品は女人成仏に言及した経典であるとは広くいわれるところである。たしかに、法華経が一仏乗を高唱し、悉皆成仏を旗標としている以上、女人のみならず凡てのものの成仏を説示しておらなければならない筈である。摩訶波闍波提（Mahāprajāpatī）やゴータマの妃耶輸陀羅（Yaśodhara）等の女人が法華経説法の会座に列し、法華経を聴受し、やがて彼女等が法華経の功徳により悟りを開いたこと、更には法華経が常に善男子・善女人と語りかけ女人を念頭におくことで説法を始めることも、一乗法華経の立場よりして当然のことといわなければならないであろう。しかし、女人成仏について考える時、一仏乗に言及することなく、提婆達多品の八才の竜女の成仏を執り上げ、それだけにより、女人成仏を解説することにはいささか素直に肯首出来かねるものが存するように思われる。

即ち、漢訳妙・正両法華経倶に、文殊支利が海中の娑竭羅竜宮に於て無量不可称計の衆生を教化し、八才の竜王の娘の成仏したことを語るのに対し、舎利弗が女人には五障がある故、竜女が無上道を得たとすることを信じ得ないとなす対話が記るされている。そして、その結論は竜女の実践で括られる。竜女が献上した宝珠 maṇi を世尊が受納する

よりも成仏は疾いとして、人々の眼前に於て竜女の成仏が演じられるわけである。そして、その説明文は次の如くである。

当時衆会皆見二竜女一。忽然之間変成二男子一。具二菩薩行一。即住二南方無垢世界一。坐二宝蓮華一成二等正覚一。三十二相　八十種好、普為二十方一切衆生一演二説妙法一。①

この妙法蓮華経に対し正法華経は次の如くである、

於斯変成男子菩薩。尋即成仏。相三十二衆好具足。国土名号衆会皆見、②

この両経に於て訳文の相異・長短はあっても、表現せんとするところのものには相異を見出すことは出来ない。更に、梵文法華経③は

atha tasyāṃ velāyāṃ sāgara-nāga-rāja-duhitā sarva-loka-pratyakṣaṃ sthavirasya ca Śāriputrasya pratyakṣaṃ tat strī'ndriyam antarhitaṃ puruṣêndriyaṃ ca prādurbhūtaṃ bodhisattva-bhūtaṃ c' ātmānaṃ saṃdarśayati | tasyāṃ velāyāṃ dakṣiṇāṃ diśaṃ prakrāntaṃ | atha dakṣiṇasyāṃ diśi Vimalā nāma loka-dhātus tatra sapta-ratna-maye bodhi-vṛkṣa-mūle niṣaṇṇam abhisaṃbuddham ātmānaṃ saṃdarśayati sma……以下略……

(時に海竜王の娘は一切世間の面前、長老舎利弗の面前で女根を転じて男根を現じ、菩薩たる自我を現ぜり。この時南方に行き、南方に無垢と名附けられる世間があり、そこの七宝合成の菩提樹下に於て座して正覚の自我を現ぜり。……三十二相を持ち、一切の特徴・色・光をもって十方を照して法の説示をなしき)

と記しており、妙正両経倶に変成男子と訳出された箇所が、女根を男根に転ずると具体的に表現されておる以外には

やはり妙・正両法華経との相異を見出すことは出来ない。

即ち、変成男子は梵文法華経の具体的表現を抽象的表現に置きかえたものである、といいうるが、何故に竜女は男に姿を変えなければ成仏し得ないのであろうか。これで果して女人の即身成仏が実証され得るものであろうか、疑はこの点に存する。そこで、この小論は、各経典の中に於て、女人成仏の問題が如何様に執り上げられておるか、についての資料の蒐集にあるといいうる。

2

提婆達多品は舎利弗の言をかりて、女人は垢穢にして、五障がある故に成仏出来えないとする従来の観念を示している。④事実、女人は仏教の歴史の中に於ても、「女人は梵行の垢なり」「女は則ち世間を累す」⑤とか、「女は梵行の垢となす、亦世間を悩害す」⑥とかなされ冷遇されて来たようである。男と女のもっている性は当然異なるものでありながらも互に相引き合う宿命をもっておると云わなければならないであろう。この宿命の故に、男は女に憧れ、やがては修行を志す人もその志を忘却の彼方に押しやる危険性をもっておるがために、かく女人が排拆されたものと思われる。修行のためには強い道念堅固が必須となるのであるが、男の心も亦はかないものといわなければならない。心のゆるみ、身心の寂漠感がいつ男を襲うとも限らない。ために、女を梵行の垢となしとこれをけなし、更に般若経の

常不レ生二下賤家一・乃至不レ生二八難之処一・常不レ受二女人身一。⑦

と女人をしりぞけることが男に対して要求せられたものであろう。このような女性に対する態度は、男女隔別の男性中心主義のものの見方であらねばならない。他方、提婆達多品に示された五障もこのような女性軽視の立場を根底と

して出発する筈である。そして、この五障は五分律巻二十六に

女人有二五礙一　不レ得レ作二天帝釈・魔天王・梵天王・転輪聖王・三界法王一⑧

と示されており、その他、南伝の多界経等多数のものにこの五礙をみることが出来るので、この五障及至女人劣視の見方は随分と古くから存在したものといいうる。

更に、無量寿経⑨には「我仏をうる。十方無量不可思議仏の世界なり。其れ女人あり。我が名字を聞いて歓喜信楽し、菩提心を発し、悪き女身を厭う。寿終るの後、また女像となる者は正覚を取らず」と示されている。これらのことからしても大乗仏教に於ても、女人劣視の感あることが強かったようである。

しかし、一切皆空・諸法無我を旗幟とする仏教思想において、このような男女隔別による女性劣視のものの見方は本来相いれざるものといわなければならないであろう。初期経典の中に世尊と阿難との論諍の存したことを認め得るが、この異和感の存したことを語るものであろうといいうる。まして、大乗仏教運動の中に於て、一切のものの我を否定し、ありのまゝにものを認めようとする、空・諸法実相の真空妙有の思想の中で、男女隔別・女性劣視の立場は当然超克せられなければならない問題であろう。そして、この問題について、採用した方法が変成男子であった。⑩

3

般若経恒河提婆品⑪は「この恒河提婆の姉は未来世の中で作仏すべし。劫を星宿と名づけ仏を金華と号す。阿難よ、この女人は女身を畢り男子の形を受け、まさに阿門仏阿卑羅提国土に生ずべし。彼に於て浄き梵行を修す。……」と述べて、明白に恒河提婆の姉が変成男子により仏となりうることを示している。更に曇摩密多訳出の転女身経⑫・曇無

纎訳出の仏説腹中女聴経⑬の同本異訳と思われる経典中では、仏が耆闍崛山で説法中に、須達多婆羅門の妻浄目は懐姙しており、彼女の腹中の女児が一心に合掌して仏の説法を聞いているのを天眼第一の阿泥盧がみて仏に告げる。仏はこれは無垢光女であるとなし、四法に関する問答のすえ、智慧第一の舎利弗もこの女のために論破されてしまった。そこで、仏はこの女の願を聴いて女身を転じて男子たらしめ、女は出家して菩薩となった、とする物語が展開されておるが、こゝにみられるものも変成男子思想である。亦、般若の空思想に基いて大乗の菩薩行を説いたとなされる大樹緊那羅王所問経⑭は、大樹那羅王の諸夫人等が「我等は無上道心を発せども、終のこの女人の身を以てしては阿耨多羅三藐三菩提を成ぜず。世尊よ我等がために法を説き、我等の輩をして女身を転捨し男子の身を得、疾く無上正真の道を成ぜしめたまえ」と語るのにたいして世尊は「諸姉よ、諦に聴きて善くこれを思念せよ。吾まさに演説して女身を転捨して男子の身を成じ、無上正真の道を得しむべし」、と女身を転じ男子となるための十法行を展開している。

十法行とは

1 菩提心。

2 仏に親近して余天に事えず、邪見を離る。

3 身戒・口戒・意戒。

4 無為心にして布施を行ず、詐偽を以て戒を修持せず、恭敬の意を以て賢聖に趣向す、正法を聴受す。

5 法を愛し、法を楽み、法を欲し、法を聴き、法を聞き已りて正念観察して女身を穢厭し常に喜んで男子の身を成ずるを得んと欲す。

6 速疾・柔輭・質直・無偽・無幻・無作正直の心、

7　仏を念ず・仏身を得んと欲するが故に。常に正法を念ず・仏法を得んと欲するが故に。常に僧を念ず、自ら僧たるを得んが故に。常に戒を念ず、誓願浄の故に。常に捨を念ず、諸々の煩悩を捨せんが故に、常に天を念ず、菩提心を明了せんが故に、諸々の衆生を観ず、歓喜心の故に。

8　食に貪著せず。飲宴に貪著せず。丈夫に貪著せず。末香塗香に貪著せず。園林を遊観するを貪らず。戯笑を貪らず。歌音及び諸の妓楽を貪らず。舞戯を貪らず。交酒会楽を貪らず。

9　「我」有りと説かず。衆生有りと説かず。寿命及び人・丈夫有りと説かず。断見を説かず。常見を説かず。有見に著せず。無見に著せず。善く因縁法を解す。

10　諸の衆生に於て慈心を修行す。他の財封に於て貪愛を生ぜず。他の男子の人を思念せず。失命の因縁にも終に妄語せず。両舌をなさず。麁悪語せず。無義語せず。無明を起さず。瞋恚をなさず。正直の見ありて業報に依る。

であり、この十法行を成就すれば女身を男身に転じ正覚を得ることの出来るを示している。そして、この十法行の設定は、諸界は妄想にして空衆の如きであり、すべての性は空寂に於てあるとする立場、換言すると、仏教思想――特に般若の説く空思想――に立脚する深法観察の立場から発していると思われる。従って、大樹緊那羅王所問経は空・無相・無願を説き般若波羅密を高唱して、諸経中の王として衆生の済度を主張したものであり、その方便波羅密の一として諸夫人等の成仏が示されたものであろう。併し、その根底にある思想はとも角、表現に於ては従来の変成男子思想をいでることが出来得なかったといわなければならない。ちなみに、この経典は羅什訳のAD四〇二年～四一二年訳に対し、月支の支婁迦讖訳はAD一四七年～一八六年となされており、かなり早期の経典であると思われる。[15] 如上の各経典は女人の成仏について変成男子の上成仏することを示したものであるが、仏説首楞厳三昧経は堅意菩薩と

瞿域天子（Gopi）の次の如き対話を掲げている。

堅意菩薩「何の功徳を行じてか女人の身を転ぜん」

瞿域天子「善男子、大乗を発す者は男女の別異あるを見ず。所以は何かん。薩婆若の心は三界にあらず。分別ある故に男あり女あり。仁者が問う所の何の功徳を行じてか女人の身を転ぜんとならば、昔より菩薩に事えて心に諂曲なきなり」

そして、この女人の身を転ずる義についての質疑応答の後瞿域天子は

「善男子、一切諸法中成ぜず転ぜず、諸法は一味なり、法性味を謂う。善男子、我所願に随いて女人の身あり。若し我が身をして男子を成ずるを得せしむるも、女人の相に於て壊せず捨せず。善男子、是の故に当に知るべし是れ男、是れ女、倶に顚倒となす。一切諸法と及び顚倒と、悉く皆畢竟して二相を離る。」

と、諸法は一味にして、男女の差別を立てることは個我を認めることになるために顚倒である、となしている。即ちこの立場は、般若経の一切皆空説に出発することが明白であり、空観説から変我男子について、他経典より更に一歩を進めた解釈をなしていることを知りうる。次で、大方等大集経[16]は

「舎利弗よ、汝今実にいう、宝女菩薩はこれ女身や、と。この観をなすなかれ。何を以ての故に、女身を受くるは即ちこれ慧力神通の力なり。舎利弗よ、この女人はすでに無量劫中に於て男女の身を離る。かくの如きの身はこれ過去に非ず。亦、未来・現在に非ず。此身は即方便身、是の方便身は此世界九万二千の諸女人等を化し、阿耨多羅三藐三菩提心を発す。……舎利弗、我は男身に於てなお厭悔を生ず、況や女身をや」

と述べ、宝女菩薩は女であるかどうか等、と考えるべきでなく、すでに男女の別を超越したものであり、慧力神通之

力により諸天人のために方便身たる女身を現じているにすぎないとなしている。この文章は宝女菩薩に関するだけのものではなく、女性一般に対して保持する大集経の立場が認められるように思われる。大集経宝女品の別訳なる竺法護訳宝女所問経の問宝女品[17]は

「舎利弗世尊に聞うて曰く。何の罪を以て蓋し女人の身を受くるや。仏舎利弗に告ぐ。菩薩大士は罪を以て蓋し女人の身を受けず。所以は如何ん。菩薩大士は慧神通菩権方便聖明を以っての故に、女人の身を現じ群黎を開化す。……斯宝女は女人となすや、この観をなすなかれ。聖通力をうけて所変あり。則ち真の菩薩なり。当にこの観をなすべし。男子法なく、女人法なし。一切諸法の要を具足し無来無去なり。此宝女は閻浮提に処して九万二千の諸の童女衆を開化教授し、皆無上正真の道の意を発す。……舎利弗曰く。今吾は則ち男子の身を楽うを好まず、況や当に復女人の像を受くべきを。」

と述べている。即ち、内容に於て差を認め得ないが、前世の罪により女人の身になるとなす従前の女人劣視の考え方が表現せられていること、無男子法・無女人法と称し、宝女菩薩についての物語が、女人のあり方一般を示唆していることを知りうる。換言すれば、女人劣視・男女隔別の考え方に対する拒否をこの中から拾い上げることが出来る。従って、この宝女菩薩の物語の中に於ては変成男子思想[18]はすでに空観思想によって超克されておることを認めうると思われる。更に、羅什訳維摩詰所説経はその見衆生品の中に於て、

「舎利弗言く。汝何を以て女身を転ぜざるや。天曰く。我十二年よりこのかた女人の相を求めるについに得るべからず。当にいかに転ずべし。譬幻師が幻女を化作するが如し。若し人あり何を以て女身を転ぜずやと問はば、是人正問となすや否や。舎利弗曰く、いななり。幻には定相なし、当にいかに転ずべし。天曰く。一切諸法も亦復是の如し。

定相あることなし。いかんぞ乃ち女身を転ぜざるを問うや。」

と、舎利弗と維摩居士の宅におった宝女の問答を掲げ、更に、宝女が神通力をもって舎利弗を女身にかえて、どうして女身を転じないのかと舎利弗に問い、舎利弗の答を待って次の如く語っている。

「舎利弗、若し能く此の女身を転ずれば即ち一切の女人も亦当に能く転ずべし。舎利弗の女に非ずして而も女身を現ぜるが如く一切の女人も亦復是の如し。女身を現ずと雖も女に非ざるなり。是の故に仏は一切の諸法を男に非ず女に非ずと説きたまひしなり。」

即ち、一切の女人は「女」ではなく、仮に女身を現じているにすぎない。人間の中に於て、「男」「女」の差別は全く存しないのであり、仮の姿にまよって諸法に定相ありと誤り、男女の差を立て男からみて女を劣視しているにすぎない。かゝる考え方は仏の教えを誤てるものであり、一切皆空、一切平等の本旨に立ち還らなければならないことを主張している。従って、

天女が舎利弗に問う。「女身の色相今いづくにかある」

舎利弗曰く「女身の色相は在もなく不在もなし。」

天女曰く。「一切諸法も亦復是の如し。在もなく不在もなし。夫れ在なく不在なしとは仏の説きたまう所なり。」

の対話は明らかに大乗仏教の真意に立脚して、変成男子の消極的且つ小乗的あり方から更に女人成仏に対する大乗のあり方を積極的に顕示したものであるといいうる。

4

如上は各経典中から女人成仏に言及せる箇所を摘出し、女人に対する態度を内容上から列記したにすぎない。しかし、ここから知りうることは、般若経・法華経等の代表的大乗経典の女人成仏観は、変成男子であり、しかも女人が仏道を修行し畢った時に於てそれは成されうると表現されていることである。この根底には女人劣視の観念が完全に掃去されずに存することを物語るものであろう。そして、大方等大集経更に維摩経は仏教思想の立場に立って女人劣視思想に対して明白な拒絶を示している。提婆達多品は後の世に於て法華経の中に編入されたものであるとなされているが、法華経より前の世に作成されたとなされる維摩経の中に秀れた女人成仏観の存することはどのような問題を含むのであろうか。維摩経と提婆達多品の成立地域の相異によるものであるか。提婆達多品の成立は維摩経よりも更に古い年代であったのか。興味は存するといいうるが、ただ、提婆達多品品はその文中に於て法華経を指摘していることを念頭において次の機会を得たいと思う。

① 大正九・P35c
② 大正九・P106a
③ 南条土田本・P227
④ 大正九・P35c　P106a
⑤ 大正九九・P266a
⑥ 大正一〇〇・P461a
⑦ 大正八・P339b・P86b・P664a・大正六・P664a等
⑧ 大正二二・P186a南伝十一下・P62十五・P370四七・P46等

⑨ 大正十二・P268c

⑩ 大正二十二・P185bc・P923a等

⑪ 大正八・P349c

⑫ 大正十四・P915bc

⑬ 大正十四・P914c

⑭ 大正十五・P367b～389a

⑮ 大正十五・P635ab

⑯ 大正十三・P33b

⑰ 〃 〃 P460b

⑱ 大正十四・P548bc・P529……支謙訳維摩詰経巻下観人物品